



「おおう……。近くで見るとすごく生々しい形……」

露出させた男性器をまじまじと見つめ、改めて
その奇妙な形状に驚く。

「あ、あの。恥ずかしいです……」

ラシェのほうが状況に耐え切れずに目をつむる。

「でも、けっこう可愛いかも…」

島風は紅い亀頭にキスをする。

「あつ」





「ほら、こうやって治療するんだよ。気持ちいい？」

皮からはみ出た亀頭の先を、優しく舐める。

「はう……あう……」

「こんな味なんだあ……」



「ほらほら、これはどう？」

「ああっ……あううつ」

「ねえ、おちんちんすっごく気持ちいいでしょ？
ねえ？」

「はいっ……き、気持ちいいですぅ……」

「どこが？」

「お……おちんちん……」

「はあ……美味しい美味しい」

ミンキュバスは長い舌をペニスに巻きつかせる。唾液に湿った生温かい舌は、獲物にぐるぐると巻きつき、その卑猥な味を楽しむ。

「ん……あん……」

「今夜はごちそう。じっくりと味わわなきやね」

ラシェはぼんやりとしたまま目を覚ます。

「ふあ……？」



ミンキュバスは亀頭をくわえ込み、吸い取る
ように強くしゃぶる。

「くううううう」

突然の淫靡な刺激に、ラシェは涙目で歯を
食いしばった。

(ピクピク動いてる……このエロチンポめ)

下品にすばんだ口は、捕獲した肉棒を
むしゃぶり、尿道からにじみ出るカウパー
腺液を吸い尽くす。

ヌロロロロ

